

学位論文題名

「クリャシェン」とは何か？－ポスト・ソ連社会における
民族＝宗教集団のエスニシティと文化活動－

学位論文内容の要旨

本論文は、ポスト・ソ連社会の中で、クリャシェンという集団がいかなる自己認識を持ち、文化活動を展開しているのかを論じる。特に近年提唱されている「ポスト社会主義人類学」論に則り、この集団がソ連と社会主義から受けた影響を前提としながら、ソ連時代以前・以後の変容と連続性を分析している。そもそもクリャシェンはしばしば「受洗タタール」と呼ばれ、ムスリムが圧倒的多数を占めるタタール人の中の、ロシア正教を受け入れた少数の集団と見なされている。しかしソ連崩壊以降、クリャシェンの中から知識人を中心に、自らをタタールとは独立した民族として定義し、独自の文化復興を行おうという動きが見られる。本論文では、クリャシェンがタタールとの関係の中でいかに自らのエスニシティを認識しているのか、それを表現するためにいかなる方法を用いているのか、そこで宗教がどのような役割を果たしているのかを中心的な問いとし、これらの問題とかつてのソ連の政策の関係を議論している。

資料としては、本学位申請者が2008年9月から2010年10月、および2011年7月にロシア連邦タタールスタン共和国で行ったフィールドワークの成果を中心としながら、文書館史料、ロシア帝政期・ソ連期に雑誌・新聞・書籍で公刊された民族誌、インターネット資料、映像資料などを広範囲に用いている。

序論では、民族、エスニシティ、宗教復興をめぐる先行研究での理論的な議論を整理検討し、本論文の視座を確立する。また、調査地・調査対象の概要と調査内容を紹介し、本論文の構成を紹介する。

第1章「「受洗タタール」から「クリャシェン」の創出へ」では、クリャシェンのソ連時代前半までの歴史を、宗教との関係および民族認定の問題を中心に概観する。ロシアによるカザン占領（1552年）以降、ヴォルガ地域の諸民族に対する改宗政策が実施されたが、19世紀になると、ロシア正教を棄ててイスラームへと回帰するための請願が相次ぐようになった。この動きに対抗するため、19世紀後半にイリミンスキーらが現地人の母語を用いた正教的啓蒙活動を展開すると、非ロシア人正教徒の間に近代的知識人が生まれた。彼らを中心にクリャシェン民族を名乗る人々が現れ、ロシア革命期に民族運動が高揚した。ソ連は一時クリャシェンを民族として公認したが、「諸民族の接近と融合」が必要とされる中で、彼らをタタールの一部

として扱うようになった。

第2章「クリャシェン民族」を求めて」は、ペレストロイカ以降、タタール民族復興運動と並行して展開したクリャシェンによる運動を分析する。クリャシェン知識人たちは当初、タタールの一部としてムスリム・タタールと協力しながら自らの文化復興を進めようとしたが、タタールの間でイスラームへの関心が強まると孤立し、独立した民族を名乗るようになった。民族の名乗り・認定の問題が特に顕著に表れたのが2002年の全露国勢調査であり、これをしてクリャシェンの起源、宗教、文化的独自性をめぐるムスリム・タタールとの論争は激しさを増した。しかし2007年にクリャシェンの民族組織や文化活動に対する共和国の支援が強化されると議論は沈静化した。2010年の国勢調査は静かに行われたが、結果的にクリャシェンとして記録された人の数は2002年と比べて増えている。本章の小括では、クリャシェンが、ソ連時代以来国家が規定してきた民族の枠組みを前提としつつ、その中での排除を経験したことで、自分たちの地位の是正を求めて独自の民族を名乗るようになった過程を、アイデンティティの政治化という概念を使って整理する。

本論文後半の3つの章では、クリャシェンをめぐる議論や運動の展開を具体的に論じる。まず第3章「スティグマとしてのクリャシェン」では、2005年のカザン1000年祭に合わせて制作されたタタール語歴史映画『ジョレイハ』を取り上げる。この映画は、20世紀前半に活躍した作家イスハキの戯曲をもとに、改宗政策によって家族と引き離された女性ジョレイハを主人公として、帝政下のタタールの苦境を描いている。監督トゥフワトゥッリンは、映画の中でジョレイハに同情するロシア人などを描くことで、宗教や民族の違いを超えた連帯の必要性を強調しようとした。しかしロシア正教会などからは、この映画は宗教的な対立を助長するという批判が起きた。実際この映画の描写は、クリャシェンが「誤ったタタール」であるという印象を与えかねないものである。まさにこのような位置づけを解消するために、クリャシェンは改宗政策以前に起源を持つ独自の民族としての主張を行っているのである。

第4章「宗教との対峙」では、クリャシェンのロシア正教に対する理解と、民族運動と宗教の関係を検討した。ソ連時代末期以降宗教復興が進み、正教徒やムスリムとしての自意識が強くなっているが、それが必ずしも礼拝など宗教実践の熱心さに結びついていないわけではない。特にクリャシェン民族運動の中心を担っている人々が、宗教活動に対して消極的であることは注目に値する。教会はむしろ、クリャシェンが集まって母語を公的に使用できる場所として重視されている。他方、土着信仰由来の儀礼をめぐっては、意見の対立が鮮明になっている。ロシア正教会はこれらの儀礼、特に供儀を伴うものについて否定的な態度を取るが、多くの人々はこれを自分たちの伝統的習慣と受け止め、また民族運動家たちは民族の独自性を証明する古くからの文化として重視するのである。

第5章「クリャシェン文化の所在」は、クリャシェンの民族文化の実践・提示の仕方を、ソ連的な民族文化フォーマットとの関係で分析する。ソ連時代は、社会主義的な価値観に沿う限りにおいて、物質的・外形的な民族文化表象が推奨され、宗教的な要素も「伝統的」「民族的」という解釈によって許容され得た。そうした民族文化を支えたのは民族学、学校、博物館、

アンサンブルであり、これらは現在のクリャシェン文化の提示・実践においても重要な役割を果たし続けている。クリャシェン文化のさまざまな要素の集大成と言えるのがピトラウという祭りで、共和国の支援も受けているが、ソ連時代に整理・様式化された文化の応用という側面を持っており、古い時代の祭りを経験した人々や熱心な正教徒からは違和感も持たれている。

結論では、クリャシェンがムスリム・タタールとの関係の中で自らのエスニシティを顕在化させ、ロシアやタタルスタンの制度に合わせながら自らの独自性を示す運動をしていることを述べる。そして、現在のロシアにおける民族や宗教への関心が、ソ連時代の「空白」を埋めようとする志向を持ちつつも、ソ連時代の文化フォーマットをいまだに利用し続けていることを強調する。

学位論文審査の要旨

主査	教授	宇山	智彦
副査	准教授	長縄	宣博
副査	教授	栗山	敬己

学位論文題名

「クリャシェン」とは何か？－ポスト・ソ連社会における 民族＝宗教集団のエスニシティと文化活動－

本論文は2012年11月30日に提出され、同年12月14日に審査委員会が発足した。その後5回の審査委員会と、2013年2月1日の公開口頭試問を経て、同年2月18日の文学研究科教授会において審査結果報告を行った。

審査委員会は、論文内容の検討においてまず、本学位申請者が民族と宗教の関係を考察するために、言語や生活文化はタタール人に近く、宗教はロシア人に近いクリャシェンを選んだことは、優れた着眼であると評価した。クリャシェンについては、ロシア帝政期のイスラーム回帰（「棄教」）に注目した研究は少なからずあるが、ロシア正教にとどまった人々のその後の生活やアイデンティティについては先行研究が乏しい。本論文は、世界的にも類例のない、クリャシェンについてのトータルな研究であり、パイオニア的な試みとして今後多くの研究者に参照されるであろう。

研究分野としては主に文化人類学に属する論文だが、歴史も先行研究や文書館史料などを使って丹念に把握している。また、祝祭、儀礼といった人類学でよく用いられる素材だけでなく、国勢調査、映画などを用いて、民族と宗教の問題に多面的なアプローチをしていることも特筆される。現地調査においては、民族運動・宗教運動や祝祭・儀礼を詳細に観察すると同時に、それらを醒めた目で見ると人々にも注目し、バランスのとれた複眼的な観察をしている。その結果、クリャシェンがムスリム・タタールと異なるアイデンティティを持つのは専らキリスト教が拠り所だという通念を覆し、人々が宗教と民族文化に向ける多様な視線を鮮やかに描いている。クリャシェン民族運動は教会が「悪魔の祭り」と呼ぶ古い信仰に基づく祭りをクリャシェンの特徴的なものとしてとらえる場合さえあること、ただし彼らが目指しているのはクリャシェンの昔のあり方を文字通り取り戻すことではなく、民族として自らを再定義しそのための形式を整えることであること、といった指摘は興味深い。

また、旧ソ連地域を対象とした人類学において有力な潮流であるポスト社会主義人類学の論

点をよく把握しているだけでなく、類似の研究と比べても、民族運動・民族文化表象がソ連的なフォーマットを利用するありさまを詳細かつ多面的に描き出すことに成功している。たとえば、宗教的要素を伝統的・民族的と解釈することにより許容する、国家の認定を受け、その援助の対象となることで民族文化の発展の余地が生まれる、といったソ連的なあり方が、現在も受け継がれていることを明らかにしたのである。また、アイデンティティの政治化とスティグマに関する議論は、民族論・アイデンティティ論一般に刺激を与えうる。人類学において「民族」や「文化」を扱うことを避ける傾向も見られる昨今の研究状況の中で、本論文は民族論の新展開につながる可能性を持っている。

口頭試問で審査委員会は、上述のような本論文の研究成果を非常に高く評価した。同時に、本論文がタタルスタンという特徴ある共和国に住むクリャシェンという独特な集団を論じていることは魅力的である一方で、ロシア全体における民族や宗教の意味を明らかにするという目的からはやや遠ざかっていること、帝政末期とポスト・ソ連期の比較などを歴史研究として深める余地があること、「ポスト・ポスト社会主義」的論点が取り込まれていないこと、地域を超えた人類学全般に向けての理論的提示がまだ十分でないこと、などの望蜀的な指摘をした。しかし、博士論文としてのまとまりを保つためには、本論文の対象と問題の設定範囲は極めて適切であり、不十分な部分は、申請者が今後クリャシェンに限らずヴォルガ地域のさまざまな民族に研究対象を広げていく過程で解決することが可能と思われる。

したがって、審査委員会は全員一致して、本論文は博士（学術）の学位授与にふさわしいとの結論に達した。